阪 大市内 14 版△ 2021年(令和3年)5月20日(木) 産経新聞

西成の修道女 野宿者におにぎり・毛布・マスク…

救いの手そっと 30年

平等にある命 守りたい

野宿者におにぎりと布マスクを配るマリア・コラレスさん=大阪市西成区

大阪市西成区を中心に野宿者や生活困窮者らへの支援活動を続ける修道女のマリア・コラレスさん

大阪市西成区の修道女マリア・コラレスさん(83)は、野宿者におにぎりや毛布を配る「夜回り」を続けて30年余りになる。新型コロナウイルスの感染拡大で「炊き出しを休止する団体もあるなか、こんな人も平等にある命をまもりたい」と、導入日、路上に立ち続けている。

マリア・コラレスさん

11日午後9時前、マリアさんが所属するカトリックの聖母被昇天修道会西成修道院(西成区旭1-1-8)の近くに、1台のワゴン車が止まった。

運転するのは、系列の社会福祉法人聖光会大阪支部の責任者、森下敏行さん(50)。森下さんが作ったおにぎりを積んだワゴン車は、マリアさんを乗せて走り出した。

まず向かったのは、浪速区日本橋の電気街。シャッターを下ろした店舗の前で、寝袋に頭までくるまって横たわる男性にマリアさんが声をかけた。

「大丈夫ですか。おにぎりはいかがですか」

男性が寝袋からそっと伸ばした手のひらに、マリアさんはラップに包んだおにぎりを一つ乗せる。男性はか細い声で「ありがとう」と応じた。

ワゴン車は、阪神高速の高架下や天王寺公園を順番に回り、西成区の釜ケ崎にある「あいりん総合センター」(閉館)へ。センターの周りは粗大ごみや木用品が山積みだが、その上でも多くの野宿者が眠りについている。マリアさんは一人一人のそばにひざまずき、「おにぎりもどうぞ」と声をかける。

長年の顔なじみも多い。マリアさんを待っていたかのように「シスター」と、近寄ってくる人も。この日は、ほかのスタッフらと計40個のおにぎりと布マスクを配った。

野宿者の多くは土木作業などの日雇い労働に就けなくなった高齢者たちだ。マリアさんは22歳で宣教のためにスペインから来日し、1989年に西成に赴任。当時と比べ「野宿者はずいぶん少なくなった」と言う。最近もセンターの周りで2人の高齢男性が相次いで衰弱死した。マリアさんは2人がいつもいた場所に立ち、胸に十字を切った。

近畿大3年の吉村美紀さん(20)が夜回りに参加するようになったのは半年ほど前。自宅の近くに気になる野宿者がいた。ある日、その人が寝起きしていたベンチが撤去され、困っている様子だったのに、どう声をかけたらいいかわからなかった。「なんとかできたら……」。後悔から困窮者支援団体でボランティア活動を始め、夜回りにも顔を出すようになった。「近くに暮らしながら遠かった場所が、自分の身近になった」と話す。

4月25日、府内に3度目の緊急事態宣言が出された。釜ケ崎では野宿者の命綱でもある炊き出しの団体も休止した団体もあるなかで、マリアさんは「命を守りたい」との一心で、活動を続けている。野宿者に配るマスクや毛布などの物資は不足していないという。

今、マリアさんには一人でも多くの人に知ってほしいことがある。野宿者が生まれ育った環境や、十分に教育を受けられなかったこと、福祉の支援にたどりつけなかったこと……。「路上に生きるのは彼らのせいではなく、いろいろな背景や理由がある。声を持たない彼らの存在に気付き、その尊厳を認めてほしい」

(小倉雅彦)

朝日デジタル 2020年7月5日

神の教え、西成で知った コロナ禍にシスターが見たもの

1936年、スペイン生まれ。聖母被昇天修道会・西成修道院シスター。少女時代にマドリードのカトリック修道院に入り、20歳でシスターに。22歳で来日し、大阪・箕面、高松、淡路島などで宣教活動にあたり、1989年、大阪・西成に赴任。野宿者の人権を守る活動や外国人難民の支援などに携わる。

新型コロナウイルスと向き合う日々が続く中、暮らしの最前線で人々は何を体験し、何を学び、今後に何を生かすのか。大阪・西成で野宿者の人権を守る活動などを続ける聖母被昇天修道会西成修道院シスターのマリア・コラレスさん(83)に聞きました。

来日60年、「なぜ日本に来たのですか」と、繰り返し聞かれます。30年前、大阪・西成に赴任するまでは「宣教のため」と信じて疑いませんでした。野宿者と出会い、私の信仰は完全にひっくり返されました。

多くの日雇い労働者が暮らす釜ケ崎で、野宿者におにぎりを配る夜回り中の出来事。顔見知りの男性に「この間、眠っていたからおにぎりを置いておいたのよ」と声をかけると、「いや、なかった」と言うのです。私は「誰かが取ったのでしょう。今度はリヤカーの陰に置いておくね」と返しました。すると男性は私をじっと見て、こう言いました。

「おなかがすいていた人が食べたんだ。それでいいじゃないか」

私は神を知らない人に福音(よい知らせ)を伝えたいと22歳でスペインから来日し、宣教のために身を捧げてきたつもりでした。でも、そのとき、まばゆいほどの福音が目の前で輝いたのです。苦しんでいる人こそが、他人の苦しみに真に共感できる。福音とは説明するものでも、伝えるものでもなく、それを生きるためのものなのだ、と。

新型コロナの感染が広がり、食料品や生活用品の買い占めが起きました。ところが、釜ケ崎ではおにぎりや手作りマスクを二つ手渡そうとすると、「一つでいいから、あの人にあげて」と言う野